

# PVC樹脂コーティング鋼管

## 流浸工業の受注好調

各種プラスチックコーティング鋼管の製造販売を行う流浸工業（本社・大阪府堺市美原区、社長・大久保秀俊氏）が製造するPVC（塩ビ）樹脂コーティング「リユースコートシリーズ」の受注が好調だ。高耐食性や軽量化への対応などのメリットにより、北海道や都内の大型再開発事業に相次いで採用されている。今後も、プレハブ化による省力化施工提案、高耐食性での長寿命化をPRし、地方物件などへの拡販も図っていく。

同社は、加熱した金属をプラスチックパウダーの入った流動槽に浸漬してピンホールのない塗膜加工を行う「流動浸漬」というコーティング法を国内で初めて行ったメーカー。同法でPVC樹脂を内

外面にコーティングしたのが「リユースコートシリーズ」だ。



受注好調なリユースコートLight<sup>®</sup>とナイロンコーティング鋼管



巻溶接鋼管と板厚6mmの薄型フランジを使用したのが「リユースコートLight」。SGPを母管にしたりリユースコート鋼管に比べて、重量を約5分の1に軽量化した。主に浄化槽などから硫化水素が発生しやすい厨房除外設備などの臭突管に使用されている。2019年には、国土交通省の新技术情報システム「NETIS」にも登録された。

直近では都内の東京駅（口径400A）や渋谷駅（同350A）近郊の再開発ビル、中央線沿線地区での駅近郊ビル（同200A）などに納入。また、大阪の大型物件向けで過去最大口径となる500Aサイズを受注した。

原設計の段階でスペックインされる事例も増えており、東北や中部地区の病院や大学施設、工場などでも採用されており、今後用途の拡大が期待されている。データ管など多様な形状があり、鋼管の溶接加工後、母管に肉厚1mmのS製品しかなかったホッパー市場でコストパフォーマンスの高い金属ホッパーとして認知度が高まってきた。これまでオフィスビルや病院建築での採用がメインだったが、直近では神奈川や埼玉で工場案件での採用も増加している。

流浸工業は流動浸漬法のほか、粉体に高電圧を与えて電氣的に粉体と基材を接着させる「静電粉体塗装法」、小部品を無保持・無接点でコーティングする「ミニコート法」の三つの方法でナイロンコーティング鋼管の加工も行っている。一昨年には「ナイロン11樹脂独自認証規格」ACA（Approved Coating Applicator）「認証」を国内企業として初めて取得した。

アルケマ社はナイロン11パウダー樹脂を生産している世界唯一のメーカー。同年には抗ウイルス効果を持ったナイロン11樹脂の製造にも成功している。

受水槽として使用されるパネルタンクや給水配管など耐食性が求められる分野で幅広く使用されている。直近では、冷却水配管向けデータセンターでは複数の新設案件で採用。大量データ処理時に発生する熱の冷却に防食鋼管として一定の需要があるものとみられる。

配管全体では鋼管からSUS管へのシフトが顕著だが、ニッケル相場の動向など不透明要因もある。コストメリットや安定供給の観点からも、各種コーティング鋼管の拡販を図っていく方針だ。

## 北海道、都内など 大型再開発事業向け納入

### 高耐食性に利点、軽量化対応も

鋼鋼管（SGP）に塩ビ樹脂を内外面にコーティングで防食加工を行う事業で、48階建て超高層マンション向けに口径200A、250A自由度の高さも選定された要因の中心に約200本導入。ナイロン一つと考えられる。

同シリーズで、母管に肉厚1mmのSGPに比べてコストが約6割削減されている。また、排水系統6mmのスパイラル鋼管、または板



リユースコートホッパー

